

「検非違使忠明」の教材研究

―「集」としての読解の試み―

川上 知里

一、はじめに

説話文学の特徴としてしばしば挙げられるのが、短編性と教訓性である。今成元昭は説話文学を「珍しい、事実話を、用いて、人間の、あるべき生きた、備えるべき智慧を、端的に、説き示す、文学領域の、言語作品」と定義したが、そこにも「端的」な文章であり、かつ「説示」する文学であることが指摘されている。このような特徴を持つ説話文学が、学校教育の中で古文への導入教材として利用されるのは自然な流れであっただろう。特に、初めて体系的に古文文法を学び、古文の本格的な読解に取り組み始める高校「国語総合」においては、難解な文法事項や敬語が比較的少なく、また短く物語展開が理解しやすい説話文学が、ほぼ全ての教科書で古典編の巻頭に置かれている。

ここで、「国語総合」に絞って現在の教科書を調査してみると、例外なく二―三話の説話が「古文入門」や「古文に親しむ」というタイトルのもとで配置されている。具体的には『宇治拾遺物語』の「児のそら寝」「絵仏師良秀」、『今昔物語集』の「検非違使忠明」「阿蘇の史」などが定番教材となろう。教材の後ろに付された「学習の手引き」「古文学習のしおり」等の部分を参照すれば、歴史的仮名遣いや品詞の識別、活用形の確認など、古文文法の基礎を学習するために置かれた教材であることが窺われ、具体的に説話内容に踏み込み、登場人物や編者の思想を深く考察する取り組みは少ないと言わざるを得ない。簡単にまとめれば、これらの説話教材は「平易な読み物」として内容は読み流され、基本的な文法事項を確認・学習するための素材として利用されているという現

状がある。

現行の高等学校学習指導要領（平成二十五年四月一日施行）においては「読むこと」の指導事項として「文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすること」が挙げられ、新設された「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」には「言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること」とある。また文部科学省による指導要領解説には「古典を読むことへの意欲を喚起するためには、古典を学ぶことの意義を認識させることが大切である。そのためにも、近代以降の文章と同様に、表現の仕方に注意したり、要約や詳述をしたり、想像力をはたらかせたりしながら読み味わい、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしていくことが大切である⁽²⁾」との提言がある。

そして、説話文学ほど、このような目標に近づきやすい教材はないと言っても過言ではあるまい。素材の面白さは伝統的な言語文化への興味・関心を引

き出すことに寄与するであろうし、一話一話から昔の人々の多様な見方に接することができる。何より、それらの話を収集し、取捨選択し、自身の言葉で語り直していく説話集編者の意図に迫る試みは、「書き手の意図をとら」えることに繋がり、また、それと生徒自身との比較を通して「ものの見方、感じ方、考え方を豊かに」することも十分可能であろう。そこで、「面白い小咄」として読み流されている説話教材に、「編者の意図」という観点を導入することで、より深い読解へと導く授業について、一提案を試みたい。

二、観音靈驗譚としての「検非違使忠明」

伝承という営みを本質とする説話は、元来非常に多義的な存在である。説話が生成し、説話集に採録されるまでの間に幾度もの伝承を経ることで、説話には重層的な意味が付与される⁽³⁾。そして、時にはアンビバレントな意味を内包する説話に向き合い、自身の意志で意味を絞り込み、限定する作業を、説話集編者は行わなければならない。そうすることで、

初めて編者は一つの体系だった作品を構築することができる。そのような作業を行う上で非常に有効的な方法が、配列による意味の限定と、語り方による意味の限定であろう。以下、この二つの観点から多義的な説話の読解について考えてみたい。

本稿で取り上げるのは、古文導入の定番教材である『検非違使忠明』である。本話は『宇治拾遺物語』『今昔物語集』『古本説話集』の三作品に同文的同話が存在し、数研出版・教育出版・明治書院は『宇治拾遺物語』（以下『宇治拾遺』）から、東京書籍は『今昔物語集』（以下『今昔』）から採録している。京の童部たちと諍いを起こし、逃げ場を無くした検非違使の忠明が、清水寺の舞台から薮を携えて谷底に飛び降り、風圧を助けに無事逃げ果せた本話は、清水寺を一度は目にしたことがあるであろう高校生にとって、一話の展開や興味が理解しやすい教材と言える。

しかし、編者の意図（本話をどのような意図で作品内に収載したのか）や編者の〈読み〉（説話のどのような意味を強調しようとしたのか）を考えようとすると、それは必ずしも単純な問いではないことに

気付く。それは、この説話が三つの説話集の中でそれぞれ異なる様相を見せていることに起因している。

まず、『今昔』から見てみよう。本話は卷一九第四〇話に置かれ、三宝加護をテーマにしたと思しき話群（三五―四四話）の中に位置する。特に前話の三九話から四二話までの四話は観音菩薩の靈驗譚が並べられており、観音靈驗話群を構成している。また、『今昔』には二話一類様式が存在することが提唱されて⁽⁵⁾久しいが、本説話の後（四一話）には、清水寺から谷に児を落としてしまった女が観音に祈念すると、児は積もった木の葉の上に落ち無事だったという、本話と非常に類似した説話が載る。この『今昔』の構成に鑑みると、『今昔』編者がまず第一に強調した本話のテーマは、清水寺の観音靈驗であったと言える。また、その構成と呼応するように、『今昔』本文には以下のような記述がある。

忠明、京童部ノ刀ヲ拔テ立向ケル時、御堂ノ方ニ向テ、「観音助ケ給ヘ」ト申ケレバ、「偏ニ此レ其ノ故也」トナム思ヒケル。

右の忠明の祈念と思考は、同話である『宇治拾遺』

や『古本説話集』（以下『古本』）には存在せず、今昔編者の手による話末評だと想定される。とすれば、『今昔』編者が本話をまずは「清水寺の観音靈驗譚」として捉え、語り直し、作品に定位したと考えられる。

続いて『古本』を見てみると、本話は下巻第四九話に置かれている。『古本』は上巻に和歌説話、下巻に仏教説話を収めた説話集であるため、まず下巻に置かれている時点で、何かしらの仏教的要素に編者が注目したことは確かである。そして、『古本』に収められた本説話の特徴としては、先述の『今昔』巻一九第四一話（児が清水寺の谷底に落ちる話）と併せて一話を構成している点が挙げられる。以下に両話の継ぎ目の部分を掲載する。

京童、谷を見下して、あさましがりて、立ち並みてなん見下しける。又、いつごろのことにかありけん、女の、児を抱きて、御堂の前の谷をのぞきて立てる程に、

右の本文の通り、『古本』の忠明説話には『今昔』のような観音靈驗を強調する文言が存在せず、京童が為す術無く傍観したところで前半部が閉じられる。

そのため、忠明説話が靈驗譚として置かれているかどうかは判別しがたい。しかし、忠明説話に続けて児の落下説話が語られ、その中では「仏の御前に向きて、「観音、助け給へ」と手をすりて惑ふに」という女の祈念が語られる点、またその話末が「人く見て抱き上げて、あさましがり、貴がりけり」と結ばれる点は見過ごすことができない。連続して語られる児落下説話が観音靈驗譚として語られているならば、併せて一話を構成し、舞台も展開も酷似する忠明説話は、同様に清水寺観音による靈驗譚であると『古本』編者が捉えていたことは明らかであろう。

『古本』の編纂は依拠資料に極力手を加えない方針で行われたと思しく、⁽⁶⁾『今昔』のように限定したい説話の意味を語りで強調するという行為はほぼ見受けられない。そのような作品の特性上、『古本』の説話本文から忠明説話の（読み）を汲み取ることは難しい。しかし、類似した清水寺の観音靈驗譚と併せて一話を形成させ、またそれを下巻の中に仏教説話として置いた編纂行為から、編者の忠明説話への認識が『今昔』と同様のものであったことが窺えるのである。

三、人間行動としての「検非違使忠明」

『今昔』『古本』の両書が忠明説話を観音靈驗譚として捉え、作品内に定位した一方で、『宇治拾遺』編者はやや異なる〈読み〉を見せる。一話一話の意味を強く限定する志向性を持つ『今昔』とは対照的に、『宇治拾遺』の意識は説話の意味を広く開放する方向に向かっている。⁽⁷⁾ そのような編者の志向が、この忠明説話からも顕著に窺えるのである。

本話は『宇治拾遺』第九五話に置かれ、前話（九四話）には肥満の三条中納言の過食説話が、後話（九六話）には「わらしべ長者」として著名な長谷観音の靈驗譚が載る。一見すると無関係な説話を雑纂方式で並べたような『宇治拾遺』の説話が、実はきめ細やかな連想の糸で繋がれていることは多くの先行研究が指摘するところであるが、忠明説話と後話との連想を考慮すれば、『宇治拾遺』においても観音靈驗の要素は完全に捨象されているとはいえない。

確かに、『宇治拾遺』では標題にも本文にも「観音」という語が登場せず、配列と語りの両面から靈驗譚

であることを強調する『今昔』とは異なり、語りから観音靈驗譚という〈読み〉を汲み取ることは至難の業である。しかし、後話のわらしべ長者の説話は、当初は全く恩恵を与えてくれないように思われた長谷寺の観音の力が話の展開とともに徐々に明らかになり、最終的には青侍を「いみじき徳人」にまでのし上げた観音の確かな靈驗力が語られる説話である。後話を読了した時点で、再び前話の忠明説話に目を向ければ、そこに同じ観音という存在が隠されており、忠明にもおそらく清水寺の観音の靈驗が及んだであろうと想定することは、不可能なことではあるまい。

しかし、この観音靈驗という連想の糸が非常に細かいことが『宇治拾遺』の特徴であろう。『今昔』と『古本』の両作品において、児が清水寺の谷底に落下する説話が忠明説話と連続して置かれている現状を見れば、⁽⁹⁾ おそらく三作品の母体資料でも、忠明説話と児落下説話が連続していたであろうことが推定される。それを忠実に踏襲した『古本』や、さらに語りの上でも靈驗の要素を加えた『今昔』とは異なり、

『宇治拾遺』の編者は敢えてその強固な連想で結ばれた両話を切り離し、より連関の薄い長谷寺の観音説話を後話に配置した。この編纂行為により、忠明説話の靈驗譚としての意味は極端に薄まり、後話との連想から辛うじて読み取れるような現状が生まれている。

それでは、靈驗譚としての意味を薄める代わりに、『宇治拾遺』編者が強く打ち出した意味は何か。それは忠明の知力と剛胆さ、そして合理性という、本話を人間行動の一環として解釈した〈読み〉だと考える。観音という存在を抜いて本話に向き合えば、そこには一人で多勢の若者と渡り合う武力に優れた検非違使としての姿や、とっさの判断で蓐を手にする知力にあふれた様子、そして身一つで谷底に飛び降りる剛胆さなどが生き生きと描き出されていることに気付く。その結果、「鳥のゐるやうに」落下し逃げ去る現象は、観音の靈驗という超人的な力抜きでも、合理的に理解できるように仕組まれている。

そして、その〈読み〉は前話の三条中納言説話と対比することで、より一層鮮やかに浮かび上がる。

第九四話は、博識で剛胆で、風流でも知られる三条中納言の説話である。彼は極度の肥満に苦しみ薬師に相談し、飯を水漬けにして食すよう指示された。しかし、それでも全く痩せないため、食事の様子を薬師に見せると、そのあまりの食事量の多さに薬師も匙を投げたという説話である。知力や剛胆なども共通する忠明と三条中納言ではあるが、事件に対する対応は正反対である。薬師の指示を言葉上では守り、「いひしまゝにすれど、そのしるしもなし」と不思議がる中納言と、窮地に迫り込まれた際に瞬時に判断を下し、九死に一生を得た忠明とは非常に対照的である。そこには、「いくら痩せるはずの食し方でも過度な量を食べれば痩せるはずもない」、「非常に深い谷底でも、蓐を鳥の羽のように脇に抱え、落下する風圧を利用すれば、無事に降り立つことも可能である」という、非常に現実的かつ合理的な編者の思考が窺える。博識で才長けた中納言と、臨機応変に対応する機知を有する忠明、質の異なる「知」を有する両者の対極的な行動から、現実を分析しようとする『宇治拾遺』編者の試みが、配列から浮か

び上がってくるのである。

四、おわりに

このように、単純な展開の説話に見える「検非違使忠明」にも、複数の〈読み〉の可能性が存在する。各説話集の編者たちはこの非常に短い一編と向き合い、各々が選択した意味を語りや配列によって強調し、作品内にそれぞれ異なる形で定位させた。この〈読み〉の違いが積み重なり、説話集の確固たる個性が形成されていく。そして、このような〈読み〉の多様性や説話集の編纂行為を生徒たちに認識させることは、冒頭で述べた国語科教育の目標を高い次元で達成することに繋がるだろう。

具体的には、基本的な文法事項や単語を確認し、一話の展開を確認した上で、本話が他の説話集にやや異なる形で掲載されていることを提示する。その際、各説話集内で隣接する説話を補助教材として併せて紹介し、各作品の編者ごとにどのような違いがあるかを考えさせることで、生徒たちは「書き手の意図」を正しく深く捉え、「ものの見方、感じ方、

考え方」の多様さを実感することができよう。

同じような時代に生きた人々が同じ対象に接しても、それに対する見方・感じ方・考え方は一様ではない。昔の人々と現代を生きる我々との間のみならず、昔の人々の間にも異なる感性・価値観が存在するという事実を一つの説話から実感することは、生徒たちが物事を様々な立場から多面的に捉える思考構築に大きく寄与すると思われる。そして、このように一話一話に執念深く向き合い、微細な表現に留意しつつ、作品を構築していく説話集編者の営みに目を向けさせることで、単に物語展開の妙を楽しむだけでなく、伝統的な言語文化に対する深い関心を引き出す授業が可能になると思われるのである。

注

- (1) 今成元昭「説話文学試論」(『論纂 説話と説話文学』笠間書院、一九七九年)
- (2) 文部科学省「高等学校学習指導要領解説国語編」(教育出版株式会社、二〇二〇年)
- (3) 竹村信治「『今昔物語集』の編纂」(『説話文学研

究』29、一九九四年六月）参照。

- (4) 森正人「説話の意味と機能―百座法談聞書抄考」
（『場の物語論』若草書房、二〇三年）参照。

- (5) 国東文麿『今昔物語集成立考』（早稲田大学出版部、一九六二年）ほか。

- (6) 拙稿「説話化の営み―『世継物語』『古本説話集』から見えるもの―」（『国学院雑誌』115―12、二〇二四年三月）参照。

- (7) 荒木浩『説話集の構想と意匠』（勉誠出版、二〇三年）、野本東生「宇治拾遺物語と評語」（『国語と国文学』85―7、二〇〇八年七月）ほか。

- (8) 益田勝実「中世的諷刺家のおもかげ―『宇治拾遺物語』の作者―」（『文学』34―12、一九六六年三月）ほか。

- (9) なお、この児落下説話は『宇治拾遺』には未収録。

※『今昔物語集』『古本説話集』『宇治拾遺物語』の本文引用は新日本古典文学大系に拠る。